

シェイクスピアとジェンダー

—— クレオパトラとジェンダーの驚き ——

浜 名 恵 美

I. 驚異と領有：ジェンダーの驚き¹

本論では、ジェンダー研究と驚異研究(wonder studies) — より正確には、驚異なるもの(the marvelous)と驚き(wonder)の研究を接合する。この節では、驚異なるものと驚きの諸理論の中からステイーヴン・グリーンブラット(Stephen Greenblatt)の理論を領有して、ジェンダー研究に接合する理由、ジェンダーは驚きとして作用するという仮説の根拠、この仮説の意義について論じる。

Marvelous Possessions: the Wonder of the New World (Oxford: Oxford UP, 1991) — 邦訳『驚異と占有：新世界の驚き』 — におけるグリーンブラットの根本的関心は、自己と他者の関係 — 差異と同一性 — を理解することである。これは、特定の文化がそれとは異なる文化に遭遇したとき、および特定の文化に属する人間が異文化に属する人間に遭遇したときに生起する、多様な自己と他者の関係を理解することを指す。それだけではなく、こうした遭遇のときに、個人の中で生起する「自己の中の他者の発見」も「他者の中の自己の発見」を理解することも意味しうる。

ジェンダーはひとつの差異の体系として構築されている。『驚異と占有：新世界の驚き』の前に、近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテキストにおける自己と他者の関係を扱った著書を、グリーンブラットは出版している。『ルネサンスの自己成型：トマス・モアからシェイクスピアまで』(1980)と『シェイクスピアにおける交渉：ルネサンス期イングランドにみられる社会的エネルギーの循環』(1988)である。(『悪口を習う：近代初期の文化論』(1990)も出版されているが、これは後述する。)²これらの著書によって、彼が、クリフォード・ギアツ(Clifford Geertz)の文化人類学または解釈学的人类学、ミシェル・フーコー(Michel Foucault)の権力と知の考え方などを導入することによって、文化のなかで主体が構成される仕方、作家の書く行為、あるいは作家の著書をはじめとする多様なテキストが社会に循環してゆくなかで及ぼす

感化とそれが蒙る変容、などのあいだの動的な関係を解明することを試み、1980年代以降、アメリカを中心として発展する新歴史主義の基礎を築いたことはよく知られている。新歴史主義には、やがてフェミニズムの研究者も加わっていった。たとえば、『ルネサンスの自己成型』に関連しては、そのフェミニズム批評版ともいえるカレン・ニューマン (Karen Newman) の *Fashioning Femininity and the English Renaissance Drama* (Chicago: U of Chicago P, 1991) が出ている。『シェイクスピアにおける交渉』では、驚異研究からもジェンダー研究からも注目すべき他者として、魔女、姦婦などが論じられている。

しかし、『驚異と占有：新世界の驚き』は、グリーンブラットが驚異なるものの理論を可能なかぎり最もまとまった形式で述べている著書である。このことと直接関係するので、あえて個人的動機を述べねばならない。近代初期イングランド文化およびシェイクスピアのテキストに見られるジェンダーの研究を長年行ってきて、2001年初頭のある夜更け、「ジェンダーは驚きだ！」という啓示のようなものを感じた。その契機となったのは、エリザベス一世の「処女女王の驚き」をテーマとした論文を推敲している過程であった。ジェンダーは驚きとして作用すると知覚することができたとき、それまで解くことができなかった根本的な疑問—— どうしていつの時代にもジェンダーがあり、そしてそれがなくなれないのかという疑問—— が、氷解するような知的興奮をおぼえた。そして、ジェンダーは驚きとして作用することを論証したいという意欲をかきたてられた。そこで、「処女女王の驚き」論の参考文献のひとつであるグリーンブラットの『驚異と占有：新世界の驚き』をはじめとして、驚異と驚きに関する多数の文献を読み直したり、新たに読んだ。そして、ジェンダー研究と接合するために驚異研究に着手したのだが、この分野はほとんど無限の広さと深さをもつものであることを改めて痛感せざるをえなかった。³

そこで本論では、グリーンブラットが『驚異と占有：新世界の驚き』で提示した理論に焦点をしばることにした。グリーンブラット自身は、ジェンダーについてはほとんど何も述べていない。『驚異と占有：新世界の驚き』では、スペインのイサベラ女王、イングランドのエリザベス女王、ベルナル・ディアス・デ・カステリーヨ著『メキシコ征服記』のなかで伝えられているドニャ・マリアと呼ばれるインディオの女性、その他不特定多数のインディオ女性たちも言及されたり論じられたりしている。しかし、焦点は旅行（発見、征服）記に見られるマンデヴィル、コロンブス、コルテスによる他者表象の言説を解明することである。しかし、本論では、グリーンブラットの驚異と驚きの理論を、

ジェンダー研究の立場から分析の道具として領有することにしたい。グリーンブラットは、新世界におけるヨーロッパ人の表象の痕跡をたどりながら、「原住民の文化の代弁をする、もしくはその文化について語るという誘惑」、「感情（情念）に訴える魅力」をもつ戦略に可能な限り抵抗している。⁴彼は、虐殺されたインディオの声を代弁するという批評的実践は断念して、ヨーロッパ人にインディオがどう見えたのかを解明することに徹する。これは、別の政治的立場の批評家からは批判されるとしても、知的誠実さと見なすこともできないわけではない。「悪口を習う」では、シェイクスピアの『テンペスト』をとりあげながら、そこでもヨーロッパ人に怪物視されたキャリバン⁵の代弁者になる誘惑に、グリーンブラットは抵抗している。しかし、本論では、フェミニズム・ジェンダー研究の立場から、他者、とりわけ女性的表象について語るという批評的介入をおこなう。

本論は、ジェンダーは驚きとして作用するという仮説を提唱する。近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテキストにおけるジェンダーに関わる表象および言説をとりあげるが、これらは、近代初期ヨーロッパの発見の言説に現れる驚きと関連させて、見直すことができる。ジェンダーは、他者（性）の発見および認識（または誤認）であり、他者（性）をとおしての主体（性）の確立（または未完の確立）に関わる。さらに、他者の中に自己を発見する、すなわち差異が同一性に転じるというパラドックスにも関わる。ここでは、ジェンダーに関連させて、驚きに以下のような作業定義（working definition）を与えておく。驚きとは、異質なもの、他者を認識することであり、驚愕することである。驚きは、そうした異質な他者（性）への反応であり、強烈な魔術的幻灯（phantasmagoria）ともいえる心の状態でもある。また、驚きとは、他者性もつ、見る者をその場に立ち止まらせる力、注意を引き比類のないという意識を伝える力、狂喜して注目させる力のことでもある。ジェンダーの言説における驚きはまた、自己が他者、さらに他者の他者に出会って、認識の危機、または認識が不能になったときに生起する認識論的空白を埋めるための認識論的戦略でもありうるだろう。なお、言うまでもなく、他者は外在するとは限らない。自己の中に他者を発見することもある。また、別々の存在物（entity）である自己（A）と他者（B）を想定した場合、他者（B）の他者は、自己（A）であることもある。すなわち、ジェンダーの驚きとは、自己と他者の位置が逆転するという運動でもありえるし、自己と他者が同一性を共有しているという発見——認識論的危機または喜びをもたず場合もあるし、両方をもたらず場合もあ

るできごと——でもありうる。

本論は、グリーンブラットの『驚異と占有：新世界の驚き』で提示された驚異理論を、ジェンダー研究のために領有する。したがって、グリーンブラットの驚異なるものという表象体系理論を領有して、ジェンダーは驚きとして作用する——換言すれば、ジェンダーは驚きの源泉のひとつであり、その表出の仕方は多様である——という仮説をかまえる意義について述べねばならない。さらに、ジェンダー研究のために、驚きを分析の道具としても駆使する意義についても述べねばならない。

近代初期イングランドおよびシェイクスピアのテキストに見られる女性性に関する言説は、聖母崇拜や宮廷愛の伝統——中世の伝統の名残または近代初期に起こった再評価——に見られる女性性崇拜と魔女や娼婦を代表とする女性性蔑視を両極として、好ましい意味から忌まわしい意味まで、矛盾と多様性を特徴とする。この当惑させられるほど屈折した状況を理解するために、驚異なるものという表象体系は有益な準拠枠（frame of reference）となる。驚異なるものの時代であった近代初期イングランドの男性（性）は、女性性の中に、見慣れぬもの、異質なもの、恐ろしいもの、望ましいもの、また嫌うべきものを見たと考え、そこで放棄や占有という排除または支配の作用が働いたと考えると、女性性に対する両極的な反応も相反する作用も改めて理解することができる。

驚異なるものという表象体系とは、他者表象という差異化——しばしば差別化に転じるメカニズム——を通しての自己確立または自己成型の体系である。それだけでなく、自己と他者との関係、および他者表象に関連して、放棄するにしても占有するにしても、驚異なるものという他者の他者化という表象体系または認識論的戦略は、ジェンダーがどのように作用するのかを理解するために、別（alternative）の視点を提供してくれるのである。

さらに言えば、近代初期イングランドにおけるジェンダーは、差異の体系であることは自明だとしても、その全体性をとらえることはできない。「シェイクスピアとジェンダー：序説」でジェンダー研究の動向を概観したが、⁵ジェンダーがなぜ構築されるのか、いつ構築されたのか、実際にどのようなものであったのか、個々人がジェンダーについてどのように感じていたのか考えていたのか、ジェンダーが家族、共同体、国家の中でどのように作用したのかも、完全に説明することはできない。こうした不確定性にもかかわらず、ジェンダーが複雑で驚くべき反応と効果をもたらしていることは明らかである。こうした

ジェンダーの驚くべきであると同時に、しばしば理解しがたい効果を理解するために、驚異なるものというそれ自体に矛盾と多様性を内包したパラドクシカルな枠組の中にジェンダーを置いてみることは有益である。こうした読みの戦略によって、男性性と女性性という絶対的な二項対立は成立しないことが、改めて明らかになる。なぜなら、男性性と女性性という差異は相互排他的なものではないし、差異は同一性に転じることがあるからだ。つまり、差異の体系のパラドックス自体が暴露されるのである。(ジェンダーの二項対立的な図式が無効であることは歴然としている。ジェンダー研究はこうした二項対立を是認しないが、この二項対立を前提としている。そうしない限り、ジェンダー・バイアスという概念が成立しなくなるからである。したがって、ジェンダー研究は、二項対立的なジェンダー概念を執拗に喚起して批判するのである。)

近代初期イングランドにおけるジェンダーを驚きの視点から考察することは、現代のジェンダー研究に洞察をもたらすことも指摘しておきたい。本論のもうひとつの意義は、ジェンダーに関する既成の概念および理論とは異なる視点を提供して、ジェンダーを理解する方法を示すことである。驚異なるものという差異の表象体系の中でジェンダーが驚きとして作用すると把握するとき、ジェンダーが厳密に規定することすら困難なものである事情が、既成のジェンダー学とは別の角度から見えてくる。ジェンダーがしばしば主張されるように完全に社会・文化的構築物だとしたら、その欠陥は、時間はかかるとしても、政策と教育によって是正できるはずである。しかし、フェミニズムおよびジェンダーの研究者を当惑させると同時にとくに志の高い女子学生を失望させているように、数十年間にわたるフェミニズム運動とジェンダー研究にもかかわらず、ジェンダー・バイアスは容易に是正されない。⁶ジェンダーの境界自体は揺らいでいるとしても、おそらく地球上のどこであれ、根本的な変化や変革が起こっているとは言えないだろう。現代のジェンダー研究者は、当惑しながらも、こうした状況に立ち向かっているのである。

ここで、ジェンダーは驚きとして作用するという仮説を導入すると、ジェンダーが既成の概念ではとらえきれない、対象への人間の反応、情念、ときには対象、行為、現象から得られる快感さえも包摂するものであるとわかる。ジェンダーが驚きとして作用するなら、それが排除されるべき差別的な制度として存在しているかと思うと、いつまでも脱所有する (dispossess) ことも排除することもできない力や「魅力」をもって、人間にとりついていることも理解できる。性別を問わず多数の人々が、なぜジェンダーを存続させてしまうのかも

理解できる。ジェンダー・バイアスは是正されるべきである。しかし、ジェンダーが驚きとして作用するなら、ジェンダーにとらわれた社会が持続する理由が理解できる。言うまでもなく、ジェンダーが驚きとして作用すると認めることは、ジェンダー・バイアスを是認するということでは全くない。

ジェンダーは驚きとして作用するという仮説は、ジェンダー・バイアスは正の解決策にはならないとしても、ジェンダーにとらわれた社会を、ときには楽しみながら、生き抜く知恵を授けてくれる可能性はあるだろう。フェミニズム批評の掲げる理想は高邁である。しかし、社会正義、公正、平等などを求める政治運動と直結しているために、フェミニズム批評は、ともすれば笑いやユーモアの精神に欠ける。シェイクスピアのテキストの理解に、深刻さを付与した功績があるとはいえ、その言葉の最も単純な意味での「喜び」をいくらか損なった面がないとは言えないのだ。本論で新たに導入するジェンダーの驚き論は、フェミニズム批評とジェンダー研究の学問的な真摯さを継承するとともに、文学および演劇にとってかけがえのない喜びを取りもどすことも目指している。

II. オリエントの女性の驚き

本論では、『アントニーとクレオパトラ』（初演1606-1608年）⁷を取り上げて、エジプトの女王クレオパトラに焦点をあわせ、ジェンダーが驚きとして作用することについて考察する。⁸

『アントニーとクレオパトラ』は、ローマ史劇に一応分類されるが、そういうジャンルの境界やジェンダーの境界にもおさまらない、壮大なスケールの複雑な演劇テキストである。ローマの侵略・拡張を背景とした執政官アントニーとエジプトの女王クレオパトラという二人の主演は、彼らの台詞と実際の行動との間に大きな差異を示す。このために、彼らの性格、ひいてはこのテキスト全体の意味に関する議論が連綿と続けられてきた。批評史と上演史を見れば、シェイクスピアの他のどのテキストにも劣らず、このテキストの解釈、評価、上演が困難であり続けているかがわかる。⁹言いかえれば、それだけ私たちを当惑させると同時に魅惑し続けているテキストなのである。

本論では、グリーンブラットの『驚異と占有：新世界の驚き』をジェンダー研究の立場から領有し、ジェンダーは驚きとして作用するという仮説を提唱するにあたって、近代初期イングランドのジェンダーに関わる表象や言説は近代初期ヨーロッパの発見の言説に関わる驚きと密接に関連させて読み直すことが

可能であると指摘した。『アントニーとクレオパトラ』は、私が批評的概念および方法として評価したアプロプリエーションの意義¹⁰およびジェンダーは驚きとして作用するという仮説を論証するためには、非常に興味深いテキストである。なぜなら、シェイクスピアのテキストそのものが、後述する目的のために、驚異なるものを領有しているからである。1562-63年にジョン・ホーキンス (John Hawkins) がアフリカ奴隷貿易を開始していたし、エリザベス女王は1596年と1601年に黒人の国外退去令を出した。エリザベス女王の時代の1600年に東インド会社 (the East India Company) が設立され、ジェームズの時代に東洋との貿易がより促進された。『アントニーとクレオパトラ』が執筆された当時は、地中海沿岸のヨーロッパ諸国およびオランダよりも海外進出が遅れたジェームズ朝のイングランド (1603年にスコットランドを合併した連合王国となっていたが、ここではイングランドとしておく) が、喜望峯以東のアフリカとアジアへの進出を急ぐ時期であった。すなわち、極西の島国イングランドが、帝国主義的な野望を鮮明にしつつある時期であった。¹¹近代初期イングランドの多くの人々にとって、アフリカに住む人々は、宗教的および人種・民族的な他者であり、驚異であった。その驚異を占有するためには、他者の他者化という表象的戦略が必要であった。『アントニーとクレオパトラ』では、材源のギリシャの伝記作者プルタルコス (Plutarch) の『英雄列伝』のトマス・ノース (Thomas North) による英訳版 (*The Lives of the Noble and Grecians and Romanes*, 1579) における記述とは異なり、古代エジプトの女王クレオパトラの皮膚の黒さが強調されている。このテキストは、近代初期イングランドの帝国主義的な野心と共謀していると言えるのである。

だが、もうひとつの重大な事実、エジプトの女王は、過剰、逸脱、混沌、グロテスク、怪物的なものとして他者化されているが、『アントニーとクレオパトラ』というテキストはこの驚異のオリエントに魅惑されてもいる。このテキストでは、近代初期イングランドの西洋的主体が帝国主義的目的のために、古代の東洋を領有している。古代でも近代初期でも、地理的に西洋と東洋の接点として、エジプトとは複合的なあいまいな場所であった。『アントニーとクレオパトラ』の中では「東洋 (the East)」と呼ばれているが、エジプトは、アフリカともアジアとも呼ばれ、結局、固定されていないシニフィアンと化していると言える。¹²このテキストでは、ローマが代表する西洋は男性的理性、エジプトが代表するオリエントは女性的驚きという構図を読みとることができる。そして、オリエントという女性化した他者の驚きと、クレオパトラが表象

するオリエントの女性のジェンダーの驚きが、まさに劇的に現れている。テキストの中では、女性化という他者化をしたオリエントの豊饒さに対して、それを封じ込めて占有しようとする力が作用している。だが、意義深いことに、オリエントの抵抗を読みとることもできる。

Ⅲ. クレオパトラのジェンダーの驚き

この節では、本論の焦点であるクレオパトラのジェンダーの驚きについて考察する。シェイクスピアの史劇や悲劇では、例えば、『ヘンリー六世・第一部』のジャンス・ダルクや『マクベス』のマクベス夫人のように、主要女性登場人物は、アクションの中心にいながらも、ファロセントリズムの演劇空間内部の他者として周縁化されている。こうした中心性と周縁性（他者性）からなる矛盾の場、それが彼女たちのトポスである。しかし、クレオパトラの場合、もっと重層化した最大限の矛盾の場となっている。まず彼女は、このテキストに顕著なローマの父権制や植民地主義の支配的な視線や言説にとって、根源的に異質で外在的な、征服されるべき絶対の他者として位置づけられている。近代初期イングランドの父権制と植民地主義の支配的な視線と言説を重ねれば、この他者化はさらに重層的なものとなる。

シェイクスピアの材源、プルタルコスの『英雄列伝』では、オリエントは基本的に「日出るところ」、「東方」という方位を指示する語（“orient”の語源はラテン語の“oriens”で「昇る（こと）」¹³であったが、これはローマの立場から書かれた書物であるために、エジプトを代表とするオリエントに対する偏見はすでに表れている。とくに、ローマの英雄、アントニーを誘惑・墮落させたと見なされたオリエントの官能性、歓楽が強調されている。これは、シェイクスピアのテキストでも、はっきりと描かれている。例えば、アントニーの台詞、「エジプトにもどろう、／和解のために今度の結婚をしたとはいえ、あくまで／わが喜びは東方にある（I will to Egypt; / And though I make this marriage for my peace / I'th'East my pleasure lies.）」（2幕3場37-39行）、「東方のベッドはやわらかいからな…（The beds i'th'East are soft...）」（2幕7場50行）¹⁴しかし、より注目すべきは、シェイクスピアのテキストでは材源よりもクレオパトラの他者性が強調されていることである。歴史上のクレオパトラは、マケドニア系ギリシャ人が侵入して建てたプトレマイオス王朝の最後の女王で、その体内にエジプト人の血を混じえないギリシア人であり、黒人で

はなかったと言われる。ところが、このテキストでは彼女は「黒い」女として描かれている。「考えていてください、/日の神フィーバスにかわいがられて黒くなり、/時の手で皺の刻まれた私のことを (Think on me / That am with Phoebus' amorous pinches black / And wrinkled deep in time?)」(1幕5場28-30行)。この「黒い」という言葉は、エジプトの強い太陽による日焼けで肌が褐色になったことを指しているのであり、いわゆる有色人種だと述べているわけではないと考えられている。しかし、プルタルコス自身がギリシア人であったが、彼はクレオパトラの肌が褐色であったとは述べていないので、これはシェイクスピアの表現である。¹⁵そして、近代初期イングランド人の人種差別的な偏見からすれば、「黒」や「褐色」は基本的に否定的なものであった。

クレオパトラの他者性はさらに強調されている。白人には黒い肌自体が負のイメージでありながら、逆説的な魅力をもっている。同様に、文化的他者である彼女のアンビヴァレントなエクゾティシズム(異国性/異国情緒)、官能性、神秘性などが強調されているのだ。この最高の表現が、クレオパトラがシドニス河の上でアントニーの心をとりにしてしまう場面を描写するイノバーバスの有名な台詞である。

The barge she sat in, like a burnished throne,
 Burned on the water; the poop was beaten gold;
 Purple the sails, and so perfumed that
 The winds were love-sick with them; the oars were silver,
 Which to the tune of flutes kept stroke, and made
 The water which they beat to follow faster,
 As amorous of their strokes. For her own person,
 It beggared all description: she did lie
 In her pavilion, cloth-of-gold of tissue,
 O'erpicturing that Venus where we see
 The fancy outwork nature. On each side her
 Stood pretty dimpled boys, like smiling cupids,
 With divers-coloured fans, whose wind did seem
 To glow the delicate cheeks which they did cool,
 And what they undid did. (2.2.201-15)

この描写はプルタルコスに基づいている。プルタルコスでもそこだけはとくに華麗な記述だが、散文にすぎない。それをシェイクスピアは、豪華絢爛たる詩にかえ、クレオパトラとオリエントの特異な魅力をあますところなく描いている。本論の第I節では、ジェンダーの驚きに次のような作業定義を与えた。驚きとは、異質なもの、他者を認識することであり、驚愕することである。驚きは、そうした異質な他者（性）への反応であり、強烈な魔術的幻灯ともいえる心の状態でもある。驚きとは、他者性をもつ、見る者をその場に立ち止まらせる力、注意を引き比類のないという意識を伝える力、狂喜して注目させる力のことでもある。イノバーバスの台詞は、驚きの最高の表現である。この場面で、「イノバーバスは、突然、典型的なマンデヴィルのような人物になっている。彼は、オリエントの驚き (the wonder of the Orient) に満たされ、(舞台上の聞き手に劣らず) 自分が描写している強い魔力 (enchantment) のとりこになっている」、とジョン・ギリーズ (John Gilles) が指摘している。¹⁶ギリーズの指摘は間違っていないが、本論の立場からは不十分である。より正確に言えば、イノバーバスはオリエントの女性の驚きに満たされているのである。

このテキストにおけるエジプトは、ただのエクゾティックな世界としてでなく、古代の神話的な「驚異 (marvels)」の世界としても描かれている。その驚きは、言うまでもなく、クレオパトラによって代表される。

ENOBARBUS. Age cannot wither her, nor custom stale
 Her infinite variety. Other women cloy
 The appetites they feed, but she makes hungry
 Where most she satisfies; for vilest things
 Become themselves in her, that the holy priests
 Bless her when she is riggish. (2.2.245-50)

【アントニーとクレオパトラ】では、この台詞に表現されたオリエントを劣った他者と見なす視点と、無限の魅力と豊かさをもった他者と見なす視点が、最後まで交錯している。そうした特色が、シェイクスピアのどのテキストにも劣らず、多様な解釈を生み出してきた原因のひとつである。

換言すれば、シーザーが西洋を代表し、クレオパトラが東洋を代表し、アントニーは西洋と東洋の間で宙吊りになる。シーザーとクレオパトラに関して言えば、エジプトの女王は西洋が自己のアイデンティティを確立するために必要

とした他者である。さらに言えば、西洋が、法、秩序、理性などの代表として自己を形成するために、捨てなくてはならなかったものすべてを、すわなち自己の内部にすらある矛盾、逸脱、混沌、異種混交性、官能性など、あらゆるとらえがたい「人間的な」要素のすべてを、西洋は東洋に置き換えようとする。エドワード・サイード (Edward Said) は、文明化された西洋のカウンター・イメージとしての東洋、つまり、後進性、神秘性、曖昧性、奇矯性、官能性、普遍性、受動性を表象する東洋が生みだされる過程を「西洋によるオリエントのオリエント化」と称した。この「西洋によるオリエントのオリエント化」という原型的なシナリオを、すでにこのテキストの中に読みとることができる。それだけでなく、オリエントのオリエント化とは、オリエントのジェンダー化、より正確に言えば女性化であることも明らかだろう。¹⁷ 東洋であれ女性であれ、無限に変化する他者というものは、本来、表象できないはずである。それは幻想である。しかし、精神分析の知見によれば、幻想とは主体とその無意識の欲望が複雑な形で現れる場にほかならない。幻想は、ジェンダーの構築に深いところで関わっていると同時に、そのジェンダーを侵犯する力としても作用しうる。すなわち、幻想は相反する作用の複雑な力学として驚きでもあるのだ。

IV. トランスジェンダー

『アントニーとクレオパトラ』におけるジェンダーのテーマについて、クレオパトラに焦点をあわせて、さらに考察しなければならない。シェイクスピアの芝居は、大道具、小道具、衣装などは最低限のものしか使用せず、言葉で構築した詩劇であった。女優のいなかった時代に少年俳優が妖艶なクレオパトラを演じることになっていたのも、それだけ言葉によって観客の想像力に訴えるほかなかつた。いや、少年俳優が演じたからこそ、このように豊饒な言葉による芝居が成立したという逆説がある。

しかし、ジェンダー研究で重大な当時の少年俳優と異性装演劇の力学に注目して、ジャネット・エイデルマンが、『アントニーとクレオパトラ』がシェイクスピア全テキストの中できわめて特異であることを指摘している。¹⁸ シェイクスピアの異性装喜劇は、男装した女性登場人物に男性性器が欠如していることに言及して、性差を強調すると同時に、ジェンダーは衣装とパフォーマンス次第とも言われるように、性差を抹消する。とくに異性装喜劇の面白さは、男装した女性登場人物には、実は何も欠けていないとわかることである。舞台で

女性を表象している俳優の衣装の下には（両性具有的だとしても）少年の身体があるからだ。つまり、異性装演劇が山場に達するとき、性差にともなう不安は払拭される傾向がある。欠如は消滅する。この時代の舞台に女性はいなかったからである。だが、『アントニーとクレオパトラ』というテキストは異色である。自殺の決意を固めるときに、侍女たちに言う有名な台詞（5幕2場215-20行）で、クレオパトラは、自分の偉大さを表象するには、変声期前の少年俳優ではむりだと指摘しているのだ。

The quick comedians

Extemporally will stage us and present
Our Alexandrian revels; Antony
Shall be brought drunken forth; and I shall see
Some squeaking Cleopatra boy my greatness
I'th' posture of a whore.

少年には、彼女の魅力を体現するためのものが欠如している。少年俳優の面目をつぶしかねない危険な台詞である。女王を演じる少年俳優にこうした台詞を言わせることができたのは、シェイクスピアが当の少年俳優の演技に自信をもっていたからだろう。¹⁹

この台詞に基づいてエイデルマンは、クレオパトラはみずからの女性性の力に確信をもっているので、自分を演じる少年俳優を貧弱な模倣として切り捨てることができるのであり、彼女の心の中では、自己に欠けているものはなく、少年俳優の方が彼女の完全性を欠いた存在だ、という重大な逆転が起こっていると指摘する。少年俳優は驚きの念を起すのに有利だと言われるが、エイデルマンは、このテキストでは、そのような少年俳優の魅力と演技の限界に達するような驚くべき女性性が作りあげられていることを暗示している。しかし、こうした女性性に焦点をあわせたエイデルマンの議論には疑問がある。とくにクレオパトラが女優によって演じられるようになってからも、この役は職業女優でさえも演じることが困難であり続けているからである。ジェンダーがパフォーマンスなものであり、衣装次第であるならば、少年俳優でも女優でも、訓練を積んだ俳優に演じられるはずである。

問題の核心は、クレオパトラの女性性ではなく、無限に変化するジェンダーの魅力をもつ登場人物なのである。『アントニーとクレオパトラ』においてシェ

イクスピアは、エリザベス女王を彷彿させる驚きの女王を作りあげた。²⁰ クレオパトラの驚きは官能性を代表として複雑な要素で構成されているが、その核心は複雑きわまりないジェンダーである。それは、無限の変化を示してとらえどころがなく、見る者に、賞賛、驚き、当惑、その他のありとあらゆる反応をかきたてうる。ここではジェンダーはパフォーマンスなものだ、という前提が疑問に付されているのではない。ジェンダーがこのように複雑に構築されているのはなぜなのか、という根源的な疑問が生じるのである。この疑問を解く鍵は、このテキストの場合、ローマによるエジプトとクレオパトラの他者化と幻想にある。

さらに、この特異なジェンダーが暗示するジェンダー変換のための可能性を考察することができる。クレオパトラで頂点に達しているように、シェイクスピアのテキストにおけるジェンダーの曖昧性は驚きとして作用する。ここで、ジェンダー研究で、変革のために提唱されている概念のひとつであるトランスジェンダーに注目したい。これは、異性装、性転換、両性具有等を包括する用語である。²¹ ジェンダーの境界線を横断するあらゆる形式の考え方や行動を指しうる。トランスジェンダー化されたアイデンティティは、男性的なものとの女性的なものとの境界線を強力に攪乱する。ジェンダーにはひとつの定義がなく、その境界線自体が曖昧で不確かなものである。そうした曖昧な境界を意識的に横断、往来して、境界線をゆるがし、変化させ続けることによって、より大きな変革の契機を模索する意義は大きい。近代初期には、異性装、性転換、両性具有等の区別が現代よりも不確かであったことを考えれば、クレオパトラを焦点として、『アントニーとクレオパトラ』の中で、トランスジェンダーが先取りされて演じられていると言える。

V. 結 論

『アントニーとクレオパトラ』の結末でも、父権制とそれに抵抗する力との闘いは解決されているわけではない。だからこそ、テキスト内外のさまざまな歴史、社会、文化などをまきこんで、近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテキストの研究は、スリリングな解釈の政治学の場となるのだ。この闘いは、形をかえて、現代の私たちの問題でもある。ジェンダーは依然として進行中の問題だからである。その点でも、とくに『アントニーとクレオパトラ』の結末で、クレオパトラの多形的で流動的なジェンダーが、シーザーの男性的

主体を切り崩す驚きの瞬間は、知的に啓発的であり、見る快樂を呼び起こすことには重大な価値がある。

本論の第Ⅰ節で次のような問題提起をした。「驚異なるものという表象体系とは、他者表象という差異化——しばしば差別化に転じるメカニズム——を通しての自己確立または自己成型の体系である。それだけでなく、自己と他者との関係、および他者表象に関連して、放棄するにしても占有するにしても、驚異なるものという他者の他者化という表象体系または認識論的戦略は、ジェンダーがどのように作用するのかを理解するために、別の視点を提供してくれるのである。」容易に規定できないジェンダーが、複雑怪奇で摩訶不思議な反応と作用を生じさせる。ジェンダーの不可解な作用を理解するためには、驚異なるものというそれ自体に矛盾と多様性を内包したパラドクシカルな枠組で見てこそ、その実像が見えてくる可能性があるのではないか、ということである。

ジェンダーを驚異なるものという枠組で見ることによって、どのような実像が見えてきたのだろうか？手がかりは、ジェンダーという驚きを生み出す人間の精神または心にある。ここでペイコンの『学問の進歩』の一節は、想起するに値する。彼は、帰納法、三段論法などの「判断の術 (the arts of Judgment)」について論じながら、最後に人間の心の中に、「重要で深淵な種類の虚偽 [イドラ] (important and profound kind of fallacies)」があると指摘している。

The mind of man is far from the nature of a clear and equal glass, wherein the beams of things should reflect accordingly to their true incidence; nay, it is rather like an enchanted glass, full of superstition and imposture, if it be not delivered and reduced....

Let us consider again the false appearances imposed upon us by every man's own individual nature and custom, in that feigned supposition that Plato maketh of the cave...so like manner, although our persons live in the view of heaven, yet our spirits are included in the caves of our own complexions and customs; which minister unto us infinite errors and vain opinions, if they be not recalled to examination....

To conclude therefore, it must be confessed that it is not possible to divorce ourselves from these fallacies and false appearances, because

they are inseparable from our nature and condition of life...so yet nevertheless the caution (for all elenches, as was said, are but cautions) doth extremely import the true conduct of human judgement. (人間の精神は、事物にあたる光線がその真の入射角どおりに反射する曇りのない平らな鏡の性質であるどころか、いや、むしろ、魔法にかけられた鏡のようなものであって、その魔法をといてもとにもどさないかぎり、迷信とまやかしにみちたものである。(中略)

各人の個人的な本性と習慣によってわれわれにおしつけられる虚偽の幻像〔洞窟のイドラ〕を考えてみよう。これには、プラトンが洞穴に関して考えたつくりごとの仮定〔プラトン『国家』第七巻のはじめ〕がよい例証となる。(中略) 同じように、われわれの肉体は天の見えるところにくらしながら、しかもわれわれの精神は、われわれ自身の気質と体質と習慣との洞窟のなかにとじこめられているので、その洞窟は、点検しないと、われわれに無数のあやまちとむなしい考えをおこさせるのである。(中略)

それゆえ結論としていえば、われわれはこれらの誤謬と虚偽の偽像は、われわれの生活の本然の条件と不可分であるから、それらを免れることはできないということを告白しなければならないが、しかしそれにもかかわらず、それらに対する警告は（前述のように、すべての「論破法」は警告にほかならないから）、人間の判断を正しく導くのたいそう重要である。）²²

ベイコンによれば、人間は錯誤（イドラ）を免れない不完全な存在である。だからこそ、判断の術をよく身につけ、用心しなければならないというのである。ここで、人間の精神または心が「魔法にかけられた鏡 (an enchanted glass)」であるという比喩は非常に重要である。これは、16世紀から17世紀に流行した歪像画（パースペクティヴ, perspective）を指している。²³ 『アントニーとクレオパトラ』の中に、この歪像画に言及している一節がある。オクテーヴィアと結婚したアントニーの不実さをなじりながら、彼になお魅惑されてもいるクレオパトラの台詞である。「一方からはゴルゴンのように描いてあるけれども／もう一方から見たあの人の肖像は軍神マルスのよう。(Though he be painted one way like a Gorgon, / The other way's a Mars.)」(2幕5場116-17行)。他者のイメージは視点次第で変容する。それだけでなく、どれが実像であるのか理解することは難しい。仮に実像が見えたとしても像(イメージ)であって、

実体ではない。

さらに重要であるのは、ペイコンはイドラを追放して学問の大革新を目指した。しかし、イドラや偽りの外観は人間の生の条件の一部であるために、それから脱却することは不可能である、とペイコンが認めていることである。なぜ錯誤や偽りの外観が人間の生の条件なのか？ それは、人間の精神が魔法にかけられた鏡のようなものであり、澄んだものでも平らなものでもなく、個々人が何らかの偏りをもたざるをえないということにほかならない。換言すれば、ペイコンは、人間の条件である鏡性に触れているのである。ここで、フランセット・パクトーの美についての考察は言及するに値する。パクトーは、フロイトとラカンの精神分析をフェミニズム文化批評に応用して、美の症状を執拗に分析した。そして、美とは男性的な症状であるだけでなく、女性にとっても症状であると指摘した。男性的な見る主体と女性的な見られる対象という二項対立は通用しない。人間の存在の条件として、鏡性（スペキュラリティ）がある、すなわち人間は他者にとってイメージであるという事実をパクトーは指摘した。主体は自己をその外部でイメージとしてしか見ることができない。（人間がイドラから免れることは困難であるというペイコンの認識は、この点を洞察していると言える。） そうだとすれば、父権制秩序を転倒しても、美の症状は残るということは明らかであろう。存在の条件である鏡性、それこそが問題の核心なのだ。²⁴ ジェンダーは、精神分析的な症状ではない。しかし、それが人間の存在の条件である鏡性に起因していることは、明白である。

魔法にかけられた鏡にたとえられた人間の精神が作りだした表象体系にほかならない驚異なるものという枠組で見えてきて浮かびあがったジェンダーの実像とは、結局のところ、イドラであり歪像そのものである。このイドラを完全に放逐することは、ペイコンが告白しているように、人間には困難である。自我は他者との関係の中にある。自我を理解するためには他者が必要条件である。だからこそ、ジェンダーという差異の体系を私たちから切り離すのは困難なのである。

とはいえ、ジェンダー・バイアスを少しでも是正するために、ジェンダーがどのように構築されているのかを問い続ける知的な営み、あらゆる有効な理論を領有してジェンダー構築について考えることは、決して楽ではないが、独自の喜びをもたらしてくれる。人間の存在の条件である鏡性のためにジェンダーを解消することが困難であることに絶望するのは、愚かである。私たちは、重大な差異があるとしても、男女ともに、心的に多くの問題と矛盾を抱えながら

も、私たちの鏡性を、すなわちジェンダーを用心しながら楽しむこともできるのである。それが、近代初期イングランドの文化と『アントニーとクレオパトラ』を含めたシェイクスピアの詩と演劇テキストを、ジェンダーが驚きとして作用するという仮説から読み直して、確信をもって言える結論である。

注

1. この節に以下の英語の研究資料と内容が重複している部分があることをお断りする。
Emi Hamana, "The Wonder of Gender: A Note on *As You Like It*," 『言語文化論集』, 第58号 (2002年1月) 109-18, esp. 109-14.
2. Stephen Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare* (Chicago: U of Chicago P, 1980); Greenblatt, *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England* (Berkeley: U of California P, 1988); Greenblatt, *Learning to Curse: Essays in Early Modern Culture* (New York: Routledge, 1990).
3. 驚異研究の概観については、別稿で行う予定である。
4. グリーンブラット著、荒木正純訳『驚異と占有：新世界の驚き』（みすず書房、1994）11。
5. 浜名恵美、「シェイクスピアとジェンダー：序説」、『言語文化論集』, 第57号（2001年9月）31-36。
6. ジェンダー・バイアスを是正することが困難であるもうひとつの原因は、個人差の大きさである。ジェンダーの規範に従うことに、それほど不都合を感じない人もいれば、抵抗する人もいる。しかも、既成社会の変革には大変なエネルギーがいるだけでなく、ジェンダー・バイアスのない社会は、ジェンダーの「甘え」や「妥協」も許さない平等かつ過酷な競争社会でもありえる。このために、現状に不満をもっているも耐えてしまったほうが楽だと考えたり、ささやかな抵抗で満足しておく人々が少なくない。
これとは別に、一部の社会学者によるジェンダーの分析と記述には、文学および文化の研究をしている私から見ると、欠落している側面があるように思えてならない。
7. G.K.Hunter, *English Drama 1586-1642: The Age of Shakespeare* (Oxford: Clarendon Press, 1997). シェイクスピアが執筆したテキストの初演の（推定）年は、原則として、Hunter 544-77による。
8. 本論の中に以下の拙論の記述と重複する部分がいづらかあることをお断りする。「性の政治学／解釈の政治学——『アントニーとクレオパトラ』を読む」（日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアの歴史劇』, 研究社, 1994）215-33。
9. David Bevington, ed. *Antony and Cleopatra* (Cambridge: Cambridge UP, 1990) introduction 1-70. John Drakakis, ed., *Antony and Cleopatra* (New Casebooks series;

New York: St. Martin's Press, 1994) は、既刊の著名論文を集めたものだが、編者の序論(1-32)は優れている。Michael Neill, ed., *Anthony and Cleopatra* (Oxford: Oxford UP, 1994) introduction 1-130. 編者ニールは、女王は言うまでなく、テキスト自体が「無限の多様性」を内在しているために解釈や上演が困難であることを指摘している(67)。とくに注目されるのは、序論の「ジェンダーと自己喪失」の項目(107-11)である。John Wilders, ed., *Antony and Cleopatra* (The Arden Shakespeare, 3rd series; London: Routledge, 1995) introduction 1-84. ワイルダーズの序論は、SQの書評で指摘されているように、最新の研究や批評を軽視した古風なものなので、オックスフォード版の編者の序論の方が有益である。Barry Gaines, rev. of *Antony and Cleopatra*, ed. John Wilders, *Shakespeare Quarterly*, 50. 2 (1999): 206-7. しかし、現時点ではまだ少数の貴重なアーデン版第3シリーズの一冊なので、取り上げておく。

10. 浜名, 「シェイクスピアとジェンダー: 序説」, 40-44参照。
11. ゲアリー・テイラーが、非常に興味深い事実について論じている。ちょうど「アントニーとクレオパトラ」が執筆されたと推定される時期にあたる1607年に、アフリカにおけるおそらくシェイクスピアの芝居の最初の上演が行われた。ジェームズ一世に派遣された東インド会社の一行がスパイス諸島(the Spice Islands)——セレベス島とニュー・ギニア島の間にあるインドネシアの島群——に行く途中で、西アフリカのシエラ・レオネに立ち寄り、現地の人々を船中に招いて、余興として船員たちが「ハムレット」を上演したのである。船長ウィリアム・キーリング(William Keeling)は、アフリカの君主の使者が立派なポルトガル語を話し、驚くような機知に富んだ人物(a man of marvelous ready wit)であったと日記に書いている。Gary Taylor, "Hamlet in Africa 1607," *Travel Knowledge: European "Discoveries" in the Early Modern Period*, ed. Ivo Kamps and Jyotsna G. Singh (New York: Palgrave, 2001) 223-48参照。
12. Kim F. Hall, *Things of Darkness: Economies of Race and Gender in Early Modern England* (Ithaca: Cornell UP, 1995) 155参照。
13. シェイクスピアの全テキスト中で、「orient」という語は7回使用されている。数字は以下に基づく。Marvin Spevack, *The Harvard Concordance to Shakespeare* (Hilleshaim: Olms, 1969, 1973). この文献で使用されているシェイクスピアのテキストは、Gwynne Blakemore Evans, ed. *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1973) である。「アントニーとクレオパトラ」の中では、オリエントという語は1度用いられている("This orient pearl," 1.5.43)が、東方という意味で使われている。
14. シェイクスピアのテキストからの引用は以下による。Richard Proudfoot, Ann Thompson, and David Scott Kastan, eds., *The Arden Shakespeare Complete Works* (Surrey: Thomas Nelson, 1998). これは、第2シリーズと第3シリーズの合本で、残念ながら、後者のものはまだ少ない。邦訳は小田島雄志訳(白水社Uブックス; 東京: 白水社, 1983)による。ただし、文脈に応じて、新たに訳した箇所がある。

15. キム・F・ホールは、シェイクスピア時代の旅行記とテキストから、クレオパトラが「黒い女性」と見なされていたと主張しているだけでなく、近年研究の進んでいる当時の女性作家たちは、ローマのオクテヴィアと同化し、当時の男性作家の伝統以上にエジプト女王を人種的・文化的他者として、黒い女として描写している、と指摘している。ホールが正しいとすれば、女性作家研究にとって深刻な問題を提起することになる。Kim F. Hall 153-60.
16. John Gilles, *Shakespeare and the Geography of Difference* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 119. なお、ジョン・ギリーズは、「アントニーとクレオパトラ」の中に、プルタルコスよりもずっと古いヘロドトス（紀元前484頃-425頃）の神話的な見方、「驚異（marvels）」の世界としてのエジプト観の影響を考察している。112-23参照。
17. Reina Lewis, *Gendering Orientalism: Race, Femininity and Representation* (London: Routledge, 1996) 15-22参照。Francette Pacteau, *The Symptom of Beauty* (London: Reaktion Books, Ltd, 1994) ch. 6 Dark Continent も参照。
18. Janet Adelman, "Making Defect Perfection: Shakespeare and the One-Sex Model," in *Enacting Gender on the English Renaissance Stage*, ed. Viviana Comensoli and Anne Russell (Urbana: U of Illinois P, 1999) 24参照。
19. 初演は1606-1608年と推定されているが、シェイクスピアの生前にこの芝居が上演されたのかどうかは、実は不明である。現存しているもので、この芝居が上演された最初の記録は、1669年のものである。その中で、「かつてブラックフライアーズ劇場で上演された」シェイクスピアの芝居として言及されているだけなのだ。17世紀初頭の国王一座には、「マクベス」（1606年）のマクベス夫人、「コリオレイナス」（1608年）のヴァルミアを演じた名少年俳優がいたので、この俳優がクレオパトラを演じたという説もあるが、真偽は不明である。数世紀にわたって膨大な実証研究が行われてきた。しかし、とくに少年俳優についてはほとんど何もわかっていないのである。
20. エリザベス女王の処女女王の驚きについては、拙論が2編ある。Emi Hamana, "The Wonder of the Virgin Queen: Through Early Colonial Discourse on Virginia," in *Hot Questrists After the English Renaissance: Essays on Shakespeare and His Contemporaries*, ed. Yasunari Takahashi (New York: AMS Press, 2000) 37-52. 「処女女王の驚き —— 初期ヴァージニア植民地言説をとおして」、『英語圏文学フォーラム』（人文書院、近刊）。後者は、英語論文を邦訳して、さらに大幅に書き直したものである。
21. Joseph Bristow, *Sexuality* (London: Routledge, 1997) 226-27.
22. Francis Bacon, *The Advancement of Learning*, in *Francis Bacon: A Critical Edition of the Major Works*, ed. Brian Vickers (Oxford: Oxford UP, 1996) 226-28. ベイコン著、服部英二郎、多田英次訳『学問の進歩』（岩波書店、1974）226-30. なお、「随筆集」の中でベイコンは、アントニーの寛大さを認めつつも、酒色に弱い英雄という伝統的な見解を述べている。Francis Bacon, *Essays or Counsel, Civil and Moral* (1625), in

Francis Bacon: A Critical Edition of the Major Works 358-59. (『随筆集』は、1597年10篇、1612年40篇、1625年58篇と増補されたが、アントニーに触れている「恋愛について」は1612年に加わった項目である。)しかし、エリザベス女王の時代に執筆されたもので、4人の語り手による討論形式の貴重な趣向 (device) の中で、アントニーとクレオパトラの恋愛にベイコンは言及している。「恋愛の賛辞 (The Praise of Love)」の中で、二人の官能的な愛が弁護されている。恋愛を弁護する語り手は、恋というものはただの暇つぶしではなく、人生に不可欠の安らぎであると主張する。結局は、恋をして賢明でいられる人間はいないという理由で、反駁されてしまうのだが、『アントニーとクレオパトラ』のテキストだけでなく、シェイクスピアの『恋の骨折れ損』にも似たような論争がある点でも、注目されるテキストである。Bacon, "Of Tribute; or, giving that which due," in *Francis Bacon: A Critical Edition of the Major Works* 29-33. 514-16の注も参照。

23. 蒲池美鶴, 『シェイクスピアのアナモルフォーズ』(研究社, 1999) 1-21参照。

24. フランセット・バクトー著, 浜名恵美訳『美人 — あるいは美の症状』(研究社, 1996) 訳者あとがき, 267-71参照。